

移動式 X 線装置を用いた胸部臥位 X 線撮影の運用報告（第 2 報）

○永山大志 角田智高 松井志穂 外山慎
佐藤真也 鈴木順造

公益財団法人福島県保健衛生協会

【概要】

当協会では R4 年度から特別養護老人ホームを中心に、移動式 X 線装置による胸部臥位 X 線撮影の検診事業を実施している。移動式 X 線装置のメリットに関しては第 1 報で報告した。今回の第 2 報では実際に健診を行った施設から挙げた意見や感想をもとに、安全かつ効率的に検診を行うための工夫について報告する。

【報告】

「受容性の向上」

第 1 報で報告した通り、移動式 X 線装置を用いた検診は、受診者が日常生活している環境の中で撮影が可能である。

その為、受診者の精神的ストレスが大幅に軽減され、従来は検査への不安から生じる体動により、撮影が困難だった受診者も比較的スムーズに検査を進めることができた。また、介助者からも、屋外への移動やリフトからの転落リスクが無くなり、介助の肉体的、精神的負担が軽減されたという声を多くいただいた。

「資材配置、会場レイアウトの工夫」

昨年度は技師 2 人体制で検査に臨んでいたが、今年度より 1 人体制で行うことになったため、受診者の転落や撮影資材への接触を防ぐ目的で、撮影ベッド上の受診者に手が届く距離で画像確認等の作業が行えるよう、撮影資材の配置を工夫した。

さらに、受診者やスタッフの動線がスムーズになるよう会場のレイアウトを設定し、撮影効率の向上を図った。その結果 1 人体制でも昨年同様、1 時間で約 20 名の撮影ペースを維持することができ、健診時間短縮による大幅な拘束時間の削減を可能にできた。

「管理区域設定の工夫」

実際の撮影環境において、管理区域の設定に苦慮するケースがあった。十分な広さを確保できない部屋で撮影を行うケースでは、撮影会場に隣接する部屋や通路までを使って管理区域を設定した。管理区域として設定したスペースには、カラーコーンやカラーテープを用いて区域の可視化を行い、さらに注意喚起の掲示をすることで撮影中の通行を制限し、安全性を確保した。

【結語】

1 年間の経験を通して、胸部臥位撮影における移動式 X 線装置の有用性を改めて実感した。今後もエビデンスに基づいた被曝管理を徹底し、画質の向上と受診者負担の軽減を目指した撮影手技の研鑽に努めたい。

この事業が広く普及し、より多くの対象者の方に胸部臥位 X 線検査を受診する機会を提供できれば幸いである。